

一休という多面体
その〈像〉と語り

一休の生涯と
その語り (1)

— 風狂として —

飯島 孝良

一休の歩みとは、どのようなものであったのだろうか。あくまで簡便にはあるが、一休のことばや『一休和尚年譜』など主な史料を参照しつつ辿ることとしたい。

南北朝期の内乱が終わりを告げた応永元年〔一三九四〕正月元日に生まれた千菊丸（のちの一休宗純）は、後小松天皇（一三七七―一四三三）の落とし胤だぬであった。二十一歳の時の応永二十一年〔一四一四〕、当時参じていた西金寺の謙翁宗為（？―一四一四）と死別する。妙心寺開山の関山慧玄（一二七七―一三六〇）の法系にあった謙翁は、師の無因宗むいんそう因いん（一三二六―一四一〇）から印可状（大悟の証明書）を受け取らず、寺領莊園も有力な檀家もない暮らしぶりだったという。この師と死別した一休の絶望は、思い屈して近江の瀬田川で入水自殺を図るほどであった。

一休は何とか再起を図って、華叟宗曇かそうそうどん（一

三五二〜一四二八)の住む近江堅田の祥瑞庵に入門した。この華叟が一休の境涯を認めていたことは、『一休和尚年譜』応永二十九年「一四二二」一休二十九歳条にみえる。華叟は、自らの師である言外宗忠(ごんがいそうちゆう)(一三一五〜一三九〇)の三十三回忌に参列するため、言外ゆかりの大徳寺如意庵へ参じた。これに一休も同行するが、列席の僧がどれも厳かな正装で臨んだのに対し、一休はボロボロの僧服でやってきた。さしもの華叟もどういうわけかと訊ねると、一休は「皆さんのお引き立て役となるためです」と答えたという。そうした一休を肯った華叟は、その法要の後に「和尚の法を嗣ぐ者はおりますか」と訊ねられた折、「風狂ではあるが宗純がおります」と返答した。そのように期待を寄せていた華叟と死別するのは、一休三十五歳の時、正長元年「一四二八」のことであった。

永享十二年「一四四〇」六月には、一休は大徳寺如意庵の住職となる。これは当時としては栄転というべきものであった。ほどなく一休は華叟の十三回忌法要を営むが、そこで目にしたのは、香錢を手に大挙する京都や堺の人びとの姿であった。金品飛び交う喧噪の前に、一休は如意庵から退院する旨を兄弟子の養叟宗願(ようそうそうい)(一三七六〜一四五八)に告げる——「如意庵に住して十日、どうも気もそぞろになつてかなわん。一休を訪ねて来られるならば、魚屋か居酒屋か姪売宿におりますぞ」(『狂雲集』八五。本連載中の通し番号は伊藤敏子「狂雲集諸本の校合について」(一九六四)に準拠)。

そして一休は、下剋上の世に上下あらゆる層がないまぜとなった「十字街頭」を闊歩した。一休は、「狂雲、誰か識る、狂風に属するを、朝には山中に在り、暮には市中」(『狂

雲集』九三「山中自り市中に帰る」といい、山中（宗門）に自足しきれずに市中（世俗）においてこそ自己本分事を見出そうとしていた。ここには、室町禅僧がしばしば理念とするような、市中において隠者であろうとする姿が感じられる。これに関連して、『一休和尚年譜』宝徳元年「二四四九」一休五十六歳条には、街中で或る僧から「市中の隠」とは如何なる境地かを問われた一休が「何似生」（どんなもんじゃい！）【注】と自らを誇示してみせ、相手を打ち据えて「見せかけだけで尻すぼみの奴めが」と一喝した、というのである。一休の同時代には、白居易の示すように「市中の隠」として兵乱を離れ風流に生きることを至樂とする市隠老人こと鉄船宗熙（一四一〇〜一四九四）もおり、ひとつの時代精神であった。

一休もまた「市中の隠」として、「酒肆姪

坊」（居酒屋や淫売宿）へ出入りを表明しながらも（『狂雲集』八五、一五六など）、傾城屋（いわゆる女郎屋）の増加を歎きもしており（『狂雲集』二六一）、山門だけでなく世俗に分け入りその現実を直視することを旨としていたように思われる。

（つづく）

【注】「何似（生）」は「如何」「作麼（生）」とも同義で「どのような」という疑問詞であるが（『諸録俗語解』禅文化研究所「二九九九」、一八四頁）、反語的にも用いられ得る。『碧巖録』三十一則・頌著語に見える「何似這箇」を白隠は「コレハドウジャト圓悟豎拂子」とし（復刻版『碧巖録秘抄』ペリカン社「一九七三」、三三九頁）、「どんなもんじゃい」「さあどうだ」と他に誇示する意がみえる。

飯島 孝良（いいじまたかよし）

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける一休像―戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ペリカン社）ほか。